

報告

保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究③ 現役保育士が保育する際に感じる不安感について

松 尾 寛 子

A study of specialty when the Care Workers take care of Developmental Handicapped Child ③
About the uneasiness when it takes care of the child who needs special support

Hiroko MATSUO

Summary

The care worker takes care of child both who needs or doesnot need special support. The care workers work is diversified. There are not a lot of expertises to the child who needs special support. For the Care Workers, it is work to take care of the child, and to support the guardian to a child. It was answered that a lot of Care Workers nursery teachers had felt insecurity when the child who needed a special support took care of. The care worker feels that knowledge to special support is necessary. It is necessary to know knowledge concerning the trouble and the method of the necessary assistance.

Key words 障がい児保育、統合保育、保育士、実態調査

要 旨

保育士の職務は子どもを保育することに加え、保護者への支援や地域の子育て支援など仕事は多岐にわたり、保育士に期待されている役割は非常に大きい。保育士資格を取得後は児童福祉施設での就職が可能になるため、あらゆる子どもに対する知識や技術を持ち合わせていなければならないが、現在保育士として働いている人の中には、障がいに対する専門的知識が不足していると感じていることがある。

そこで、障がい児保育の授業の中で教授する内容を、より現場に対応できる内容にしていくことを研究の最終目的として、A市公立保育士にアンケートを実施した。そこから現役保育士が障がいのある子どもを保育する際に感じる不安感についてのみ取り出し結果を考察した。その結果、障がいのある子どもを担当する時に不安になったことがあると回答した保育士が70%以上おり、保育士養成校では、障がいの特性により、子ども

と関わる際に求められる保育内容や環境構成を考えることはもちろんのこと、不安を軽減できるような授業展開が求められているということ、支援を必要とする子どもを取り巻く人間関係やクラス運営などについても、様々な場面が想定できるような授業展開をしなければならないということがわかった。

はじめに

文部科学省より「児童福祉法等の改正による教育と福祉の連携の一層の推進について」が事務連絡として出され、2012年4月より相談支援の充実と障がい児への支援の強化が図られるようになった。

児童福祉施設で働く保育士は「子育て支援、障害児への支援、地域の児童家庭支援拠点としての児童福祉施設の位置づけ等、ケアワーク機能のみならず、ソーシャルワーク機能が大きく期待されている」¹⁾が、「担当の子がいかにもみんなの中に入って遊んでいけるか、どうしたらその子なりの年齢にあったことができるようになるか、親の気持ちを大切に思って保育も進めていきたいと思うがうまく進められない。保育内容について行事参加の方法などで保育士は悩みを抱えている」²⁾など、ケアワーク部分での悩みが依然としてあるという実態がある。

子どもの障がいの発見過程においては、妊産婦健康診査や出生後の健康診査なども大きな役割を果たしているものの、保育士は日々のかかわりの中から障がい気づくことがある。保育所等では、「発達障害などの健康診査だけでは発見が難しい障害」³⁾を発見することがあり、保育士の職務としては診断はしないものの、他児とのかかわりや遊びの中から子どもの言葉の遅れや対人関係の問題などに気づくことができる存在でもある。

また、子どもの親自身にも以下のような状況が考えられる。①親自身が子どもの発達の遅れに全く気付いておらず健康診査で発見される場合、②親自身が子どもの発達の遅れに全く気付いておらず保育所や幼稚園等に通っていて先生が遅れ等に気づく場合、③親自身が子どもの発達の遅れに気づいていても「そのうち良くなる」と思っている場合、④親自身が子どもの発達の遅れに気づいていて、先生から何か言

われるのを拒んでいる・避けている場合、⑤親自身が子どもの発達の遅れに気づいていて、積極的に子どもの療育に関わろうとしている場合、⑥親自身が子どもの発達の遅れに気づいていて、ホスピタルショッピングをしている場合、などである。

保護者の障がい受容のプロセスとしては「①ショック、②否認・悲しみ、③一時的な立ち直り、④『健常』にはならない『障害』に改めて向き合う、⑤障害の受容（新たな価値観の形成）」⁴⁾がある。保育士は保護者が医師等から子どもの障がいを告知された直後から、その障がいを受容するところまでの様々な感情と向かい合うことになり、支援方法については保護者の状態や子どもの状態などにより一様にはいかないのが現状である。

これらのことを総合的に見て、保育士は支援の必要な子どもへの保育を行うのみではなく、障がいの発見過程にも大きくかわり、保護者への支援などその果たす役割は大きいということがわかる。

そこで本研究では、アンケート結果より現役保育士が障がいのある子どもを保育する際に感じる不安感についてのみ取り出し、保育士が保育をする際、どのようなことに不安を抱いているかを明らかにしたい。

多様なニーズに対応するための 保育士養成校での学び

保育士になるにあたって、支援を必要とする子どもやその保護者に関わる学びについて関連する科目や項目を取り上げてみると、厚生労働省が示す保育士養成課程開講科目の中で、以下のような科目において支援を必要とする利用者やその家族に対する支援の方法などを学ぶ。

- ・ 障害児保育（演習・2単位）
- ・ 社会的養護（講義・2単位）

- ・家庭支援論（講義・2単位）
- ・社会的養護内容（演習・1単位）
- ・保育相談支援（演習・1単位）

また、以下の科目の中で障がいに関連する内容を学ぶ。

- ・児童家庭福祉（講義・2単位）「多様な保育ニーズへの対応」「障害のある児童への対応」
- ・社会福祉（講義・2単位）「家庭支援と社会福祉」「相談援助の意義と原則」「相談援助の方法と技術」「保育・教育・療育・保健・医療等との連携とネットワーク」
- ・相談援助（演習・1単位）「相談援助の方法と技術」「相談援助の具体的展開」「事例分析（障害のある子どもとその保護者への支援を含む）等の事例分析」
- ・保育者論（講義・2単位）「保育と保護者支援にかかわる協働」
- ・子どもの保健Ⅱ（演習・1単位）「障害のある子どもへの適切な対応」
- ・子どもの食と栄養（演習・2単位）「特別な配慮を要する子どもの食と栄養」として「障害のある子どもへの対応」

これらは平成22年7月22日から施行になり、平成23年度保育士資格取得者からは必修となっており、子どもを保育するための子どもの発達学びに加え、子どもを取り巻く支援を必要とする人すべてに対応することができるような学びにも、重点が置かれるようになっているのである。

このようにして、多様なニーズに対応することができる学びとして、新カリキュラムがスタートしているが、現在の保育現場では、新カリキュラムで学んだ保育士ではなく、旧カリキュラムで学んだ人がほとんどである。現在保育士資格取得を目指している学生は、旧カリキュラムで学んだ学生（現在の保育士）に比べ、従来の養成以上にソーシャルワーク機能を強化しているということは明らかであるため、どの程度障がいのある子どもや家族に対する支援の方法を身につけているかは、今後新任保育士の活躍を期待したいところである。しかし変わらない事実

としては、現在保育士として働いている人が、新カリキュラムの内容で学ぶ機会はほとんど持っておらず、研修等で子どもを取り巻く支援を必要とする人すべてに対応することができるような学びを得ていることが多いということである。

それに加え、以前は「障害児保育」という科目が選択であったため、その科目を選択せずに保育現場で障がいのある子どもを保育しているという実態もある。また保育所に入所してくる子どもの中には多様な支援を必要としている子どもがおり、授業で学んだことだけでは対応しきれないという実態もある。

新カリキュラムで学んだ学生が多く保育士として働き始めていくにつれ、学びの中身の違いからくる保育士自身が抱える悩みというのは軽減されていくということになるのではないかと期待されるが、今はまだ結果が出ていない。

先行研究概観

田川ほか（2006）⁵⁾によると、12園145名の保育所・通園施設で勤務する保育士にアンケートを実施した。統合保育を行うことでどのような影響があるかという質問項目では、「過剰な負担」因子として「障害児の思いもよらない行動や事態への対処が分からないので不安である」「障害をもった子どもに手を取られ、健常児の保育が十分にできない」「障害児に問題が起きた時に、責任の在り方について不安がある」「健常児よりも余分に注意と労力があるので、負担が大きい」「専門的知識がないので、常に不安である」「『ひとりの子に手をかけないでほしい』という健常児の保護者からの要望を抱えてしまう」「障害児の保育所での記録や、関係者との連絡に時間を取られ、仕事を残すことが増える」などが挙がっていた。

しかしながら「経験の蓄積や障害児保育に関する勉強会によって、保育士自身が成長するべく努力をしている」ということ、「『統合保育』を特別な保育として意気込んで意識している様子ではないと理解された」とあるように、障がいのある子どもを保育することに対して、保育士は負担感や不安感のみで

はないということも述べられている。

このことより、障がいのある子どもを保育する際、保育士は対処方法が分からず不安に感じるということ、子どもに対して保育を実施しながらも、専門的知識がないと感じているということ、しかし障がいのあるなしに関わらず、一人ひとりの子どもへの支援を考えながら保育をしていることがわかる。

山本ほか（2002）⁶⁾によると障がい児保育の専門性を必要とするという回答が95.3%であり、必要としないという人も、障がい児保育に専門的教育が不足していると感じており、障がい児保育を完全に否定する立場ではないということが、調査の結果で明らかになったとしている。

また、不足している障がい児保育の専門的教育では、「障害児固有の発達特徴」「親や家族支援」「障害児への特別な保育技能」「障害児に対する医療的ケア」「一般保育所での障害児保育の意義」「本人や家族への地域支援」「障害児・者福祉制度」の順であることも明らかにされている。

松尾（2011）⁷⁾によると、兵庫県内のA市公立保育士に対して実施したアンケート結果より、A市の保育士121名のうち、現在担当しているクラスに障がいのある子どもが「いる」と回答したのは29名（24.0%）、クラスの中に障がいのある子どもは「いない」と回答したのは69名（57.0%）、そのうち1名（0.8%）は障がいの疑いあり、と回答していた。回答無しは23名（19.0%）だった。

担当している子どもが受けている診断名については、①知的障がい（軽度・中等度・重度）11名、②ダウン症2名、③アスペルガー症候群2名、④自閉症9名、⑤視覚障がい0名、⑥聴覚障がい0名、⑦脳性まひ2名、⑧ADHD4名、⑨その他6名であった。

松尾（2012）⁸⁾によると、かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもは「いなかった」と回答した保育士は121名中16名（13.2%）おり、「いなかった」と回答した保育士のうち、5年未満の保育士のしめる割合は12名（75.0%）であった。保育の経験

年数を経過するにつれて、多くの保育士が、障がいのある子どもの保育を経験するということが、30年以上保育を経験しても、障がいのある子どもを担当することがない場合もあるということが明らかになった。

保育をする上で、特別な支援を必要とする子どもを担当するということは、その支援の必要の程度は様々であっても、保育士にとって経験を重ねると、保育の中で関わるということが明らかになっている。「障がいのある子どもを保育することは特別なこと」ではないということ、また、「専門分野外のことをしている」感覚では済まされないことであるということが述べられている。

これらの先行研究より、保育士という仕事は特別な支援を必要とする子どもやその保護者と関わる機会が多く、支援を必要とする子どもを保育する際、保育士は様々な問題に直面し、不安に思いながらも、障がい名にとらわれずにその子どもに必要な支援を考えながら保育を行っている。その一方で障がい児保育の専門的知識が不足し、その知識が必要であると感じており、大学での学びだけでは不足感を抱きながら保育をしているという実態が明らかになっている。

保育士が障がいのある子どもを保育する際、「専門的知識が不足している」と感じないように、保育士養成校ではどのような授業を展開していくことが望ましいのかを明らかにする必要があると考えた。

倫理的配慮

アンケート作成段階より、A市こども支援局保育課長、A市公立保育所園長統括者I様とともにアンケート内容について打ち合わせを行い、両者に内容についての了解を得た上で、A市保育所園長会にて配布を依頼した。アンケートは無記名による紙面調査で実施した。なお、アンケートには個人が特定できるような処理の仕方はしないということを明記した。

結果

アンケート調査対象となった保育士の保育勤務年数、現在の担当クラス、担当クラスにおける障がい児の有無については松尾（2010）に詳細を記述している。A市の保育士121名のうち、現在のクラスの中に障がいのある子どもがいると回答したのは29名（24.0％）であった。かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたかという項目の中で、いなかったと回答した保育士121名中16名（13.2％）いた。いなかったと回答した保育士のうち、5年未満の保育士のしめる割合は12名（75.0％）であった。

現在の担当クラスについては、0・1・2歳児を担当する保育士が45.4％、3歳児は12.3％、4・5歳児は15.8％、その他（フリー等）26.5％であった。0・1・2歳児は複数担任制のため、担当保育士が多く、3歳以上は、1人担任が多くなるためこのような結果になっている。

「障がいのある子どもを担当する時に不安になったことはありますか」という項目では「ある」と回答した保育士は85名（70.2％）、「ない」と回答した保育士は34名（28.1％）、未記入2名（1.7％）であった。その中には、かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたかという項目の中で、いなかったと回答した保育士16名も含まれているため、18名の保育士が、障害のある子どもを担当したことはあるが、障がいのある子どもを担当する時に不安になったことはないということになる。

障がいのある子どもを担当する時に、不安に思った内容については、どのようなことに不安を抱いたかということについて自由回答を求めた（複数回答あり）。

あると回答した保育士のうち「かかわり」については51名、「クラス運営」については19名、「保育内容」については8名、「障害特性」については7名、「パニック対応」については7名、「保護者とのかかわり」については5名、「コミュニケーションの取り方」については3名、「安全」に対しては3名、「保育のレベル」は2名、「就学」については2名、「発

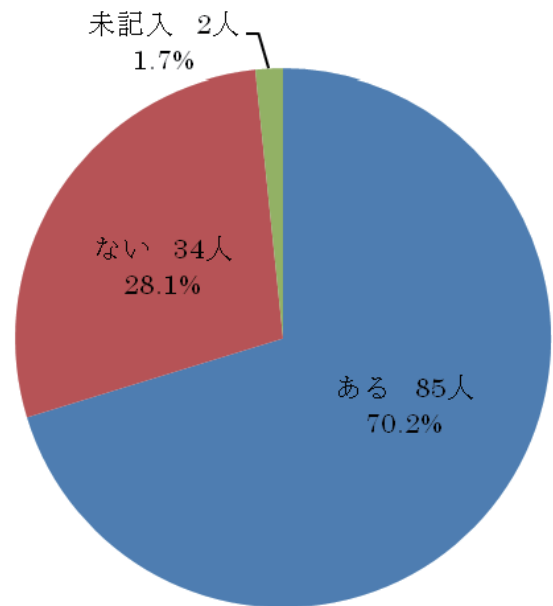


図1 障がいのある子どもを保育する際不安になったことはあるか

達の仕方」は1名、「保育士の人数不足」は1名が不安だったと回答している。

図1の障がいのある子どもを保育する際不安になったことはあると答えた85名中51名の保育士が「かかわり」について不安に思ったことがあるという回答だった。これは障がいのある子どもを保育する際に不安になったことがある保育士の60.0％が「かかわり」に対して不安に思ったことがあるということになる。

次に多かった「クラス運営」は22.4％、3番目に多かった「保育内容」は9.4％の保育士が不安に思ったことがあるという結果になった。

アンケート結果より、現在担当のクラスに障がいのある子どもを受け入れている保育士は24.0％と半数以下であるが、保育の経験年数を経過するにつれて、多くの保育士が、障がいのある子どもの保育を経験するということが明らかにされている。（松尾2011）⁹⁾

また30年以上保育を経験しても、障がいのある子どもを担当することがない場合もあるということが明らかにされている。（松尾2012）¹⁰⁾

しかし30年以上保育を経験しても、障がいのある子どもを担当することが無い場合でも、障がいのある子どもを担当として受け持たなくても、他のクラ

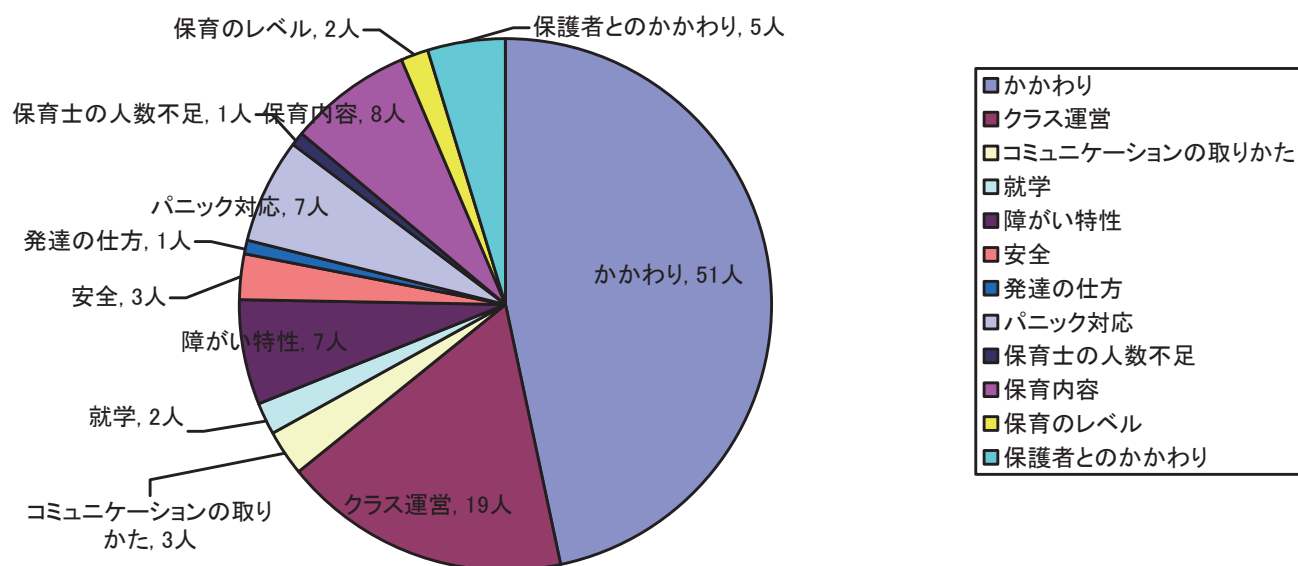


図2 何に対して不安なのか

スとの交流や、職員間同士の話や会議の中で触れているはずである。また障がいに対する知識の不足から、何らかの支援を必要とする子どもだということに気づいていなかったということも考えられる。

考察

障がいのある子どもを保育する際不安になったことはあると回答した保育士のうち60.0%の保育士が「かかわり」に対して不安に思っているということは、支援を必要とする子どもが今何を求めているのか、なぜこの行動をしているのか、ということを理解しようとしているが、それに対してどうかわればいいのか不安に思っている、どのような行動をとるのか分からず不安に思うことがある、ということではないだろうか。

子どもとのかかわりに不安を抱きながらも、その不安を解消するために園長等に相談しながら、あるいは研修等にをかけて新たな知識を獲得し、担任としてかかわっていくということは、保育士としての大きな成長にはなるため、「かかわり」に対して不安に思うことは決して悪いことではない。むしろかかわりに対して絶対的な安心感を抱いて保育を行うことのほうが問題である。アンケート結果では60.0%の保育士がかかわりに対して不安に思っているということは事実であり、今後は「不安に思うか

かわりの質」や、担当年齢によって、どのようなかかわりに不安を抱いているのかについても明らかにする必要があるのではないかと感じている。

様々な子どもたちがいるクラスの中では、特別な支援を必要とする子どもに対して個別支援計画や個別指導計画を作成する際に、発達課題の差があることにに対してクラス運営上の悩みを抱えることもある。保育士としての経験の浅さから、保護者の障がい受容の状況や子どもの発達の状態など、多様な状況に悩みを抱えてしまう場合もある。

これらのことから、多様なかかわりの実践例などを紹介したり、統合保育場面における個別支援計画や個別指導計画の実際を考える機会を設ける必要があるということがわかった。

支援を必要としている子どもの発達年齢と実年齢に差が生じることにより、その発達の差に応じた保育内容をどのレベルに合わせるのかなどに悩むこともある。

保育内容については、それぞれの子どもが楽しめるように、遊びの種類を豊富に持つことと、そこから獲得できるものは何なのかを具体的に知ること、様々な発達年齢の子どもにも対応できるように、同じ遊びの中でも異なった発達段階の子どもが楽しめるような保育を考えられるようにしなければならない。

さらに支援を必要とする子どもが必ず病院等で診断を受けているとも限らず、低年齢児を担当していると、何らかの診断名がついた子どもを保育するというより、保育士自身がこの子には特別な支援が必要なのではないかと感じ、もしかしたら診断名がつくかもしれないということに気づく場面がある。その事実を保護者にどのように伝えるのかについても悩むところのひとつである。

保護者に対する支援の方法もいくつかの事例を挙げて考えさせる必要があるのではないだろうか。

保育士は子ども同士のかかわりや遊びの中から子どもの言葉の遅れや対人関係の問題などに気づくことのできる職業である。障がい名がついてもつかなくても日々の保育は行われるため、子どもの行動特徴から「〇〇という障がいかもしれない」ということに気づくことができるだけの知識は持ち合わせておかなければならないことがある。

おわりに

授業では子どもの障がい特性もさることながら、かかわりやクラス運営の方法、具体的なかかわり方などにも焦点を当てていく必要があるということがわかった。また子どもとかかわる際に必要となる、発達年齢に相応した遊びのレパートリーを増やすことや、同じクラスの中に発達年齢の違う子どもがいても楽しめるような保育内容の充実を図ることは、発達課題に対する不安やクラス運営に対する不安が少しでも軽減できる要素となることが考えられる。

本研究では保育士が支援を必要とする子どもを保育する際に感じる不安についての調査であったが、どの年齢の子どもを担当するのか、どのような障がいの子を担当するのかにより、不安の中身が変化すると思われるため、今後は具体的な事例に基づいた保育士からの聞き取り等を通して、担当する子どもの年齢と不安にはどのような関係があるのか、どのような障がいに対してどのような不安を抱くのかなどを探っていく必要がある。

また現在までの研究では「保育士が悩んでいる実態」と「保育士養成校が考える授業内容」とが明ら

かにされてきた。今後は現役保育士が考える「保育士養成校の『障害児保育』の授業内で学んでほしいこと」を明らかにすることにより、保育現場と保育士養成校の協働としての保育士養成が可能になるのではないかと考えている。

引用文献

- 1) 鈴木敏彦、横川剛毅：保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究－保育所保育士の保護者支援を中心に－、和泉短期大学研究紀要、第30号、1－15、2009.
- 2) 藤林清仁：障害児保育担当保育士への支援、日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学研究、第4号、19－25、2009.
- 3) 伊藤健次編：新・障害のある子どもの保育（第2版）、11～263、(株)みらい、岐阜、2011.
- 4) 伊藤健次編：新・障害のある子どもの保育（第2版）、11～263、(株)みらい、岐阜、2011.
- 5) 田川元康・本谷望・津村幸子：障害児の統合保育に対する保育士の意識、京都女子大学発達教育学部紀要 第2号、23－31、2006.
- 6) 大阪千代田短期大学幼児教育科教職員集団（山本敏貢、鴨井慶雄、新見俊昌、広川律子、竹内進、山崎由紀子、吉葉研司、寺岡福子）：障害児保育に対応できる保育士養成に向けてのアンケート調査 調査報告結果報告書、大阪千代田短期大学紀要、第31号、113－134、2002.
- 7) 松尾寛子：保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究①－A市の公立保育所における障がい児の受け入れ状況について－、関西福祉大学紀要、第14巻第2号、41－46、2011.
- 8) 松尾寛子：保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究②－A市公立保育所に勤務する保育士がかつて担当したことがある障がいについて－、関西福祉大学紀要、第15巻第2号、23－27、2012.
- 9) 松尾寛子：保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究①－A市の公立保

育所における障がい児の受け入れ状況について
一、関西福祉大学紀要、第14巻第2号、41－46、2011.

- 10) 松尾寛子：保育士資格取得者に関する障がい児
保育の専門性についての研究②－A市公立保育
所に勤務する保育士がかつて担当したことがあ
る障がいについて一、関西福祉大学紀要、第15
巻第2号、23－27、2012.